
生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

dandyy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

【NZコード】

N5767J

【作者名】

dandyy

【あらすじ】

別連載「ハヤテの」とく！－！－！Super-combat story」のアナザーストーリーです。

キリカ・オブ・メナス（前書き）

アナザーストーリー第4弾は初の複数人数です。まあ三人揃つて1つみたいな感じですよね。：泉は一人でやつたけど。本当は本編に組み込んで良かつたのですが進行上オリキャラ出さなきやダメかな？と感じたので別連載という形になりました。目標はただ一つ！「完結」その二文字です。

キリカ・オブ・メナス

『や、やめてよ理沙ちゃんつてばっつ！』

『いいじやないか！いいじやないか！減るもんじやないし…』

『そういう問題じやなくって…！』

ここは白皇学院内にある動画研究部の部室。今、部員の一人である瀬川泉の恥ずかし動画を撮られた泉と花菱美希、朝風理沙の三人で見ているのだ。

「ちよつ…まだあつたのこのテープ…！」

「捨てるには惜しいな…」

「いいよお捨てても…！」

三人は今まで撮った動画の鑑賞会をやっていた。その目的は近々行われるところの理事長による部活動の視察の準備をするためだ。

「こんな変な動画ばっかじや次こそ廃部にりかねん。理事長が気に入りそうなテープを探すんだ！」

「しかし…理事長お気に入りのハヤ太君の動画は殆ど残っていないし…」

泉は大量の自作DVDを漁る。そしてハヤテ関連のDVDを数枚発見した。

「ハヤ太君が剣道やつてるやつは？」
「普通すぎる」

理沙が即却下した。

「なら…ヒナちゃんを膝枕してるのは?」

「たいして理事長は気に入らない」

美希が怒り気味で却下。

「え~?じゃあどうするの?今からじゃ間に合わないよ?」

「くそう!時間はたくさんあつたところのに我々は何をしていたんだ!!」

「仕方ない。ここは断腸の思いで泉を生贊に…」

「やだよ!あの理事長のことだから動画を携帯配信ダウンロードとかするかもしれないよお…!」

泉が本気で焦つていると部室のドアが開いた。三人は理事長が来たかと焦るが入ってきたのはまったく違う人だった。

『あ、みなさん。ケーキが焼けましたよ』

「あ、13号君」

「すまんな。おやつを頼んだりして」

『いえ。ナギお嬢さまにお三方をよろしくと言われましたので』

臨時に動画研究部を手伝うことになつたメカ執事13号。しかし三人娘によつて部活動とはまったく関係ないことに利用されていた。

『じ要望どおりフルーツケーキです』

「お~しゃ~」

「執事としてはハヤ太君よりも上だな」

「口答えしないし、宿題はやつてくれるし」

美希の言つよつて13号は三人の宿題まで一手に引き受けているの

だ。あの方に知られたら怒られることは確実だが四の五の言つていい場合ではない。毎回ギリギリの成績の三人はどんな手を使ってでも進級しなければならないのだ。三人はひとまず部活動を忘れおやつタイムに。

「ねえ？本当にどうするの？」

「それは食べたら考えるさ。焦つても答えは出ない」

理沙はケーキを頬張りながら言つ。

「最悪、ハヤ太君を今すぐ呼び出して理事長の意のままに女装させて満足させるというのは…」

「それ動画関係ないじゃん！ああーー本当に困ったぞー困ったちやんだぞ泉！」

「ええつー？そんなこと言われても…」

『あの…みんなにかお困りのようですが、一体どうしたんです？』

「…13号。なあ、このハヤ太君に瓜二つの13号を女装させて理事長の機嫌を取るというの…」

「美希ちゃん…さすがにそれはないよ…」

珍しく泉が真っ向から批判。だが美希はまだ食い下がる。

「いいや、いけるんじゃないか？後ろ姿でなおかつ顔にモザイクかければ…」

「それじゃあ誰だかわからないよ？」

「…作戦失敗か」

結局いい案が浮かばない。そんな中再び部室のドアが開いた。今度こそやって来たのは理事長・葛葉キリカとその執事暮里詩音だ。

「諸君、相変わらず無駄に時間を浪費しているようだな。少しは学院のために働いたらどうだ?」

「やうだそだ!…というわけで動画研究部は即刻廃部!…」

「ちょ…ちょっと待つてよお!…」

いきなりの廃部宣言に泉が大慌て。美希と理沙もだ。

「理事長!今、理事長が気に入りそうな動画を探しているのでしばらく時間をください!」

なんとか美希が時間を稼ぐ。キリカも少しだけだと念をおす。

「それにしてもこの部活は来客があつても菓子の一つも出さないのか?減点」

「ああーちょと理事長!…」

「か、菓子ならすぐ!…」

と理沙は言つたものの部室には甘党のキリカを満足させられそんな菓子はない。

(し、仕方ない…)

「ど、どうぞ理事長…」

苦し紛れに理沙が理事長に出したのは1~3号が作つたフルーツケーキだ。しかも半分はもう食べてなくなつていて。詩音はこれを見て怒る。

「こ、こらー食べかけを出すなんて失礼極まりないー問答無用だ!」

動画研究部は本日をもつて廃

「まあ待て詩音。…朝風。もし!このケーキが私の口に合えば今回の件は多目に見てやる!」

「ほ、本当ですか！？」

「ちよ…葛葉さま～！！」

理沙はわずかな光が射し込み笑顔に。詩音は不満そうな表情だが。

「詩音、スプーン」

「は、はい」

キリカが右手を出すと詩音は「だからかすぐ」にスプーンを出しキリ力に渡す。そしてケーキを一口食べた。緊張の一瞬。理沙は震えながらキリカの返事を待つ。

（だ、大丈夫なはずだ…！あのメカ執事が作ったんだ…！おいしくないはずが…）

理沙がびくびくするのを見てまだハヤテの動画を探していた泉と美希も緊張する。そしてキリカは顔をしかめながら理沙に質問。

「朝風。」のケーキは一体どこに売っているんだ？

「え？あ…いや、そのケーキは売り物ではなく…」

「手作りだと！？」

「は、はい！」

理沙が答えるとキリカは一気に高揚。感情を一気に爆発させた。

「う、うまい…」の世にまだこんなうまいものがあつたとは…！
朝風！－！動画研究部は存続決定だ！－！」

「ほ、本当ですか！？」

「一言はない…」

キリカの言葉で理沙を含めた三人娘は大いに喜んだ。キリカもそれを見るとイスから立ち上がる。

「よし！ 視察は終わりだ。詩音一帰るぞ」
「はい！ 葛葉さま」

視察が終わり三人娘はホッと一安心。だがその時間も長くは続かなかつた。帰り際にキリカはもう一つ理沙に聞く。

「朝風。ところでのケーキを作ったのはどこのどつだ？」
「えつと… 彼です」

理沙はすぐに13号を指さす。

「そのメカが？」

キリカは念のため聞き直した。

「はい。 そうです」
「そうか… おい、貴様」
『なんでしょうか』
「こんなところで埋もれているとは惜しい…。理事長権限により今からこのメカは私の物…！ これからは私のためにスイーツを作るのだ！」
「…ええ…？」

三人娘は驚愕。もちろん異議を申し立てる。

「か、勘弁してください理事長…」
「そうですよ！ これは元々…！」

「…私の決定に文句があるのか?なら仕方ない。やっぱり動画研究部は廃部に…」

「くつ…！」

三人娘は「廃部」の一文字を出され抵抗できなかつた。13号は不本意ながらキリカの所有物となつてしまつのだつた。

キリカ・オブ・メナス2

理事長・葛葉キリカにメカ執事1~3号を奪われた三人娘。動画研究部の廃部は免れたものの心は晴れない。

「どうする…。」そのままじゃいけないぞ」

「わかつてゐるけど…相手が理事長じゃなあ…」

美希と理沙は悩む。なんとかして1~3号を取り返さなければ。

「そうだよね…。元々ナギちゃんの物なんだから取り返さないとね

「…」
そつ言つて泉は意氣込むが一人はその事にはなんの心配もしていないようだ。

「…なにを言つてるんだ泉？」

「え? だってそうでしょ? 美希ちゃん

「違ーうーー我々が心配しているのはこれだーー」

理沙は泉にプリントの束を見せる。

「…え? 理沙ちゃん、これつて…」

「ああーーそうやーー2学期中に出さなければならない課題だーー1~3号に途中までやつてはもらつたがまだ半分以上残つているんだぞーー」

「つまり…1~3号を取り返さなければ留年の可能性が…」

「うええつーーそれは…とてつもなくピンチなんじゃ…ーー」

「だからこそ今、なんとか理事長から1~3号を取り返す策を考えているのだーー」

この考えに泉も賛同。結局誰一人として自分の力で課題を終わらせようという考えは出てこなかつた。

「でも…取り返すってどうするの？理事長、13号君のことかなり気に入っちゃつたみたいだよ？」

「…そうだ。だからあえてそこを突く…」

「突くつてどうやつて？」

「任せろ泉」

美希は携帯電話を取り出した。そしてある人物に電話をかけた。

「あ、もしもし。私だ。美希だ。今すぐ来てほしい。大丈夫。悪いようにはしないから。じゃあ」

「…誰にかけたの？」

「来てくれるといいんだが…」

そして美希が電話をかけてから数分。部室のドアが開き美希が呼んだ人物がやって来た。

「…なんなんだ？急に僕を呼び出したりして…」

「お、来たなチビッ！」

「チビッ！」言つた！…だいたいなんで僕の携帯電話の番号知つてゐんだよ…！」

「気にするな。私は政治家の娘だから」

やつて来たのはキリカの執事、詩音だ。

「美希ちゃん。呼んだのつて詩音ちゃんなの？」

「ああ。希望の星だ」

そして詩音を交え4人は対策会議へと乗り出すことに。まず始めに発言したのは詩音だ。

「ていうかなんで僕を呼んだんだよ」

「まあそれはいざれわかる。それよりチビッ「執事君。理事長は今、なにをしている?」

「その前にその呼び方はやめろ!ー!ー」

「ああ、すまん。詩音君、理事長は今なにをしている?」

美希は改めて質問。

「葛葉さまならあのメカ執事にベッタリだよ。…葛葉さま…」

詩音はどこか寂しそうな表情になる。すると待つてましたとばかりに理沙が発言。

「つまり詩音君は1-3号が邪魔だというわけだな?」

「そりゃそりゃー!あいつさえいなければ…」

「我々も理事長に1-3号を取られたままでは收まりがつかない。そこでだ! 詩音君にも理事長から1-3号を取り戻す作戦に加わってもらいたいのだ!」

「そ、そのために僕を?」

「悪い提案ではないはずだ。1-3号は私たちの元に帰つてくれれば理事長も君をまた重宝してくれるだろ?」

美希がさらに協力を求めた。詩音もじぶじぶその計画に乗ることに。

「なら…僕があのロボットを破壊してしまえば…」

「ちょっと待て!ー!それはダメだ!無傷だ!無傷で理事長から取り

戻すんだ！」

いきなり乱暴な解決策を見い出され理沙が焦る。

「確かに理事長からは取り返すことまでもできるが壊れていてはなんの意味もない」

「じゃあお前たちはどうするつもりなんだ？」

「それは…」

また振り出しに。すると美希が一つ提案した。

「要はあれだろ？私たちが理事長を満足させるような動画がなかつたから代わりに13号を取られたわけだから今から理事長を満足させるような動画を撮つてくれれば一件落着じゃないか？」

「確かに…」

「悪くはないな」

泉と理沙は共感。1人詩音だけはその作戦に難色を示した。

「やうつまくじくものかーお前たちにて葛葉さまを満足させるような動画が撮れるのか？」

「そこは今から考えようか。よし、早速…」

再び美希は携帯電話を出す。

「三十院家に電話してハヤ太君に来てもりおり。彼の女装姿をまとめたら…なら理事長も満足してくれ…あ、もしもし。はい、花菱です。実はハヤ太君を…え？ そうですか…。夜？…わかりました。では

「ど、どうした美希？ 声のトーンが明らかに低いぞ」

「マリアさんが言つに…ハヤ太君は今、ナギ君とお出かけ中りしこ。夜まで帰らないと」

「ええーっ！？じゃあどうするの～！？」

「やっぱり僕が破壊するしか…」

「それはダメだつてば～！…」

理事長お気に入りのハヤテも作戦に組み込めず4人は本当に追い詰められた。

「…」
「…」

「直談判？理沙ちゃん、どうするの？」

「メカ執事を返してくれるよう話し合いで決着をつける！…」

「無理だよ！…話し合いで解決できる理事長ならこんなに苦労しないって！…」

「やつてみなければ…わからん！…」

理沙の決意は固かつた。その日はまるで烈火のゝじとく！

「今から私が理事長に直談判してくる…。みんな、後は任せた…。
動画研究部に幸あれ！…」

「…」
「り、理沙！…自らを犠牲にしてまで…！…」

「理沙ちゃん…私、理沙ちゃんの勇姿、忘れないよ…」

「さひばだ、友よ…！」

理沙は威風堂々、部屋を出た。そんな空氣に詩音はあまり馴染めなかつたらしく。

「…とかついで出てきたはいがどうすの?」

理沙は理事長室前でうるさいしていた。いや直談判するとなると話を聞いてもらえるか甚だ疑問だったからだ。一応交渉材料として購販で買ったラスクがある。

「まあどう考へても(ケーキ×ラスク)だらうがないよつは…」

ラスク片手に理沙は部屋の扉を開く。

「あ、朝風理沙、入ります…」

鍵はかかっていないが中には誰もいなかつた。理沙は誰もいないのを確認すると堂々と中に入つていぐ。

「理事長…留守か」

『あ、これはこれは朝風お嬢さま』

「ん?」

理沙がちりつと横を見るとそこには13号がいたのだ。

「おお！13号…あれ？理事長はどうした？」

『理事長さまはなにやら用事ができたとかで出かけました』

「やつが…！」

(これはチャンスだ! 今のうちに...)

「13号! 理事長がいない今がチャンスだ! 一緒に帰るぞ!」

『...それはおそらく無理です』

「ど、どうしてだ! ?」

『後ろを...』

「後ろ?」

理沙が振つ返るとなんとやらにはキリカがいたのだ。しかも詩音も一緒だ。

「な、理事長! ?」

「まったく...詩音を探しに行つていた隙に私の部屋に盗みに入るとは...不届き千万! !」

「ち、違こます理事長! 私は理事長と話し合ひを...」

なんとか理沙が弁解しようとするが詩音の一言ですべてを打ち砕かれる。

「葛葉さまーウソですかー! こいつは初めてからこの部屋に盗みに入ったんですね! !」

「なー! おーい! ! 裏切るとほどうこうじだ! !」

「これから仲間になつたつもりはない! !」

理沙の発言と詩音の発言、キリカがどちらを信用するかなど一目瞭然だ。

「詩音。お前、このメカに嫉妬していたようだが...そんな心配する必要はない。私の一番はいつだってお前なのだから...」

「ぐ、葛葉さま...」

「そういうわけだ朝風! ! 貴様は罰としてこれから私の怒りが收ま

るまで私の手となり足となり働いてもらひやう。

「げつ！！なぜ！？」

「犯罪を犯したんだ！当然の処置だ！」

『諦めじやうじやう。明廻お譲り出

「じゅ、13号！お前まで裏切るか！！」

まさに四面楚歌。理沙にこの包围網を逃れる術は残つていなかつた。

「ああ詩音、メカ執事！朝風を正装に着替えさせるのだー！」

卷之三

卷之三

理沙の悲痛な叫びは動画研究部の部室にいた一人にも届いた。

「なんだか嫌な予感がする…」さつき理事長が来たばかりというの

二〇一

「美希ちゃん！ 私、ちょっと見てくるよ！ 理沙ちゃんが私の助けを呼んでる気がするんだ！」

泉は理沙の安否を確かめるべく駆け出した。理沙の犠牲は動画研究部に迫る脅威の始まりに過ぎなかつたのだつた…。

「理沙ちゃんが」のドアの向こうへ……。」

泉は理沙を救うべく理事長室の前に来ていた。その表情は固く冷や汗をかいている。そしておそるおそるドアを開け、中に足を踏み入れた。するとそこには我が田を縫う光景が飛び込んできたのだ。

「よ、どうもお密わま」

「うわあ……り、理沙ちゃん！？」

出迎えたのはスカメイド服姿の理沙だった。しかも首輪をつけられている。泉はただただ焦る。

「ちゅう……どうしたの理沙ちゃん！？」

「…………」

「な、なんで黙つたままなのよー！」

「恥ずかしいからに決まってるだり……」

理沙は赤面しながら答える。すると急にドアが閉まり奥から詩音がやってきた。

「……また動画研究部の……一体なんの用だ？」

「ど、どうも理沙ちゃんを助けに……」

「無駄だ……こいつはもう葛葉さまの忠実なメイド……帰れ」とは不可能だ！」

「すまない……泉。せつかく助けに来ててくれたのに……」

「ど、どうして……？」

泉は恐々としながら聞く。すべての事情は詩音が話した。

「『』につついている首輪には葛葉さまから逃げようとする電流が流れ仕組みになつていてる！」

「ええ！？ そんなのヒドイよ！」

「葛葉さまの部屋に勝手に忍び込んだんだ。当然の報いだ！」

なんとか理沙を連れ戻したい。泉はその一心で詩音にある提案を持ち出した。

「だつたら…私と勝負して私が勝てば理沙ちゃんと13号君を連れて帰れるつていうのはどう…？」

「な、なにを急に…！ そんなこと」

「なかなか面白やうだな」

「く、葛葉さま！？」

「どこからともなくキリカが現れた。詩音は泉の提案に難色を示していたがキリカの態度を見るや一転した。

「…わかりました。葛葉さま」

「…瀬川よ。だが、お前が負ければ朝風と同じように私のメイドとして働いてもらひつぞ？ 競技もこちらで決める。いいな？」

「くつ…！」

「その条件がのめなければ『』からは勝負など…」

「わ、わかりました！ やります！」

泉はキリカの意見に従つた。

「泉…！ 大丈夫なのか！？」

「それはちょっと微妙だけど… 理沙ちゃんのためなら…」

「泉…」

「よし！競技内容を発表する！」

突如部屋が真っ暗になりドラムの音が鳴り響く。そしてキリカの机にスポットライトが当たられ競技の書かれた紙が照らされた。

「競技内容は『チキチキ・執事同士の決闘対決』だ！」

「執事同士の決闘対決！？」

キリカの宣言と共に部屋の中は喝采に包まれた。とりあえず泉と理沙は復唱。すぐにキリカがルール説明を始めた。

「瀬川。貴様には兄で執事でもある虎鉄がいるだろ？そこだ。虎鉄と詩音とが戦い虎鉄が勝てばお前の勝利としてやるつー。」

「つまり…私たちの運命を虎鉄君に託すってこと！？」

「簡単に言えばそつなるな。どうする？主と執事は一心同体。貴様が本当に虎鉄を信じているならこの勝負受けたるだろ？」「

キリカは余裕の表情。泉は悩んだ。

(だ、だけど…これは私たちの問題…虎鉄君を巻き込むわけには…！)

「どうした？この条件がのめなければお前の敗けだぞ？」

「うう…ごめん虎鉄君…！理事長！私、この勝負受けます！」

「そこなくてはな。詩音、準備しろ」

「ハイ、葛葉さま」

詩音がボタンを押すと突如理事長室にリングが出現。舞台は整った。

「やあー、あとは虎鉄を呼ぶだけだぞ？」

「は、
はい！」

泉は携帯電話を取り出した。そして虎鉄の携帯電話にかける。

1

呼び出し音がひたすら鳴る。いつになつても虎鉄は出ない。

一
い
泉
：?」

- - - - -

しばらく理事長室は静寂に包まれた。そして5分が経過した時、葛葉が声を出す。

「時間切れ。残念だが貴様は失格だ。よつてこの勝負我々の勝ちだ！」

ええ――！？」「

まさかの不戦敗に泉も理沙も慌てずにはいられない。

「そ、そんな！理事長一つ！！」

恨むなら自分の執事を恨むんだな。では、約束どおり、詩音！

四

一九一九年二月

「泉い！！」

負けた泉は理沙と同じくミニスカメイド服姿に。これでキリカのペツト同然に。

「ふえ～ん！人権侵害だよお～！」

「さて…」そのまま置いておくだけでは芸がない」

キリカが指を鳴らすと突然黒服の男数人が泉と理沙を取り囲んだ。

「な、なんだ」「つらは…？」

「ふつふつふ…」「つらは私の自慢の精銳部隊…さあお前たち…やつてしまえ！」

キリカの合図と共に黒服の男たちは全員ポケットの中に手を入れた。

「まさか…撃つんじゃ…」

「嫌だよおお…！」

そして次の瞬間、たくさんの音と光が一人を襲つた。

パシヤー！カシャカシャ！

「…へ？」

「これって…」

男たちがポケットから出したのはデジカメだ。そして一心不乱に二人を撮影はじめる。

「見たか！」「いつらは私の専属カメラマン軍団！私の妖艶ですばらしい姿をいつでも撮れるよういつでもスタンバイしている…」

「…いや、一体なんのために…」

「そこで今回は貴様らのメイド服姿をカメラに収め現像し学院内に
ばらまくという恥辱を『えてやろう』と思つ！－」

「な、なんですと！－？」

「あんた本当に理事長かよ！－！」

あまりの仕打ちに泉も理沙も黙つてはいられない。

「こら！葛葉さまに対してなんて口の聞き方だ！お仕置きだ！」

「キヤアアアア－！」

詩音がボタンを押すと二人に電流が走る。

「いいぞ…！その弱々しい感じがたまらなく萌える…！」

「あつ…！痛つ…！」

「くそ…！鉄のせいだ…！鉄の…！」

虎鉄を呪いながら悶える理沙。結局泉も捕まってしまい救出作戦は失敗に終わってしまった。そして泉が理沙を助けに向かつてから15分。唯一部室に残っていた美希も一人が帰つてこないことを怪しく思い始めた。

「…」これはマズイな。泉も理沙も…どうしたんだ？

美希は何パターンか考えた。どれもすべて理事長に一人が捕まつたビジュンだ。

「…どうしよう。私だけである理事長に勝つなんて不可能…なら…対理事長最強の彼女にすべてを託すしか他ない！－」

美希はイスから立ち上がり部室を出た。そして学院内で一際存在感

を示す高い高い時計塔へ足を運んだ。助けを求める人物に会いたい
美希だつたがエレベーターのボタンを押そうかという瞬間、迷いが
生じた。

(だけど…今、生徒会室に行くのは…)

今というのは放課後だ。基本生徒会メンバーである美希は放課後に
生徒会室にいなければならぬがいつものようにサボったため行く
となにかと都合が悪いと感じたのだ。しかし四の五の言つてはいら
れない美希はエレベーターに乗り込んだ。すぐに最上階に到着！

…かと思こあや。

ガクンッ！

「う、うわあ…? な、なんなんだ急に…?」

なんといきなりエレベーターが止まってしまったのだ。このエレ
ベーターは古いのでよくあることじじいが。

「…最悪だ。なんでまた私の時に…一ひとつせならヒナギクの時に止
まってくれれば良かつたのにな…」

ぐちぐち言こながら助けを待つこと。

5分…

10分…

助けは一向に来る気配がない。だんだん美希も不安になってきた。

「なんで…なんでこないんだ…！ちょっと…みんな気付いてないのか…！そ、そうだ！」

ようやく美希は非常用の呼び出しベルに気付く。しかしあまりに古いためのかなにか書かれていた。

『このエレベーターが止まった時は自力で直すか誰かが気付くのを待つてください』

「な、なんだこのエレベーター…？明らかに違法だろ…！いいのかこれ…？大丈夫なのかこれ…？学院改革の前にエレベーター直すのが先だろ…！だ、誰か…－－つ…！」

普段には見れないほど美希はあたふた。完全に動揺している。助けを呼びに行くはずが自分が助けてもらわなければならない立場になってしまふのだった。

そして美希が1人孤独の中で恐怖と戦っている頃、生徒会メンバーはと言つと…。

「ですから、そこは三角形ABFがADEと同じ大きさなので辺A Bの長さはDEと等しい。よって長さは8cmです」

「そういうことか…。さすがハル子ね」

「だてに生徒会の書記ではないですからね~」

生徒会長であるヒナギクと書記の千桜、そして副会長の愛歌は学院内の図書館で試験に向けての勉強中だ。ちなみに美希はいつも生徒会の仕事に行かないで知らないのだがこの日は特別に生徒会は休みになつたのだ。よつて美希がエレベーターに閉じ込められていることなど誰も知らない。

「しかし会長が私たちを試験勉強に誘うなんて珍しいですね」

「なんでも一人でできちゃいそうだものね~」

「そんなことないわよ。みんなでやれば見えてくるものもあるし教え合えば効率もいいじゃない」

「まあ会長はいつも例の三人を教えてますからね…」

「将来は家庭教師かしらね」

「ならないわよ。私だって勉強するならもっと教えて良かったと思えるような人とやりたいわよ。いつも赤点ギリギリで留年しそうな美希たちに毎回教えてると胃が痛くなりそうだわ」

ヒナギクはそう言つてペンを置く。疲れもあつてか眠そうだ。

「とりあえず… そろそろ図書館の閉館時間ですからお開きにしますか?」

「そうですね千桜さん。でも本当は千桜さんが一番帰りたいんじや

「…

「そんなことはありませんよ。じゃあ…行きましょうか

「そうね」

「ええ」

三人は荷物をまとめて図書館を後にした。果たして美希の運命やいかに！？

生徒会の逆襲

美希がエレベーターに閉じ込められてから数10分。外部からの連絡はなにもなくただただ時間が過ぎていく。携帯電話もなにか別の電波に邪魔されて通じない。

(…一体どうすれば…!)

そんな時、美希の脳裏にある言葉が過る。

『私があなたを守るから』

(…そうだ。いつだつて私を助けてくれた…頼む…私を助けてくれ…!)

手を合わせ祈ること数秒。“ガクン”という鈍い音と共にエレベーターは急に下に下がり始めた。

(う、動いた…!)

そして下に到着しドアが開く。そこに立っていたのは生徒会長であるヒナギクだ。

「じめんなさい。このエレベーターすぐ止まっちゃうみたい…つて…美希? もしかして…」

「ヒ、ヒナ…うわああ…!」「ちよつ…どうしたの、急に…」

人目もばばかりず美希はその場に泣き崩れる。ようやく恐怖から解

放された安堵と願いが通じたからだ。

「と、とりあえず上行く？私、忘れ物しちゃったから…」

「あ、ああ…そうだな…」

ハンカチで涙を拭き美希はヒナギクと共に最上階にある生徒会室へ改めて向かう。

「ちょっと待つて。私、コーヒー入れるから
「うん。ありがとう…」

少し経つて「コーヒーを入れたヒナギクと美希はソファーに隣り合わせで腰かける。一口飲み、美希が声を出した。

「…実はさっきまでエレベーターに閉じ込められていたんだ。ヒナ
ガ来なかつたら…まだ…私は…」

「そう…だったの」

「本当に…ありがとう」

「…いいのよ。お礼なんて。私たち一人の仲じゃない。今度理事長
に言ってエレベーターを改装してもらいましょう。今日はもう遅い
し明日にでも…」

「ヒナ…。あと、折り入って頼みがあるんだが…」

「へ？なに？」

美希は理事長に理沙と泉、13号が捕まつたことを説明する。

「…だけど私じゃどうにも…。お願ひだ！！協力してくれ…」

「…そういうことね」

ヒナギクは急いでコーヒーを片付ける。そして持っていた力

パンをソファーに置きエレベーターへと向かう。

「美希はここで待つて。私はこれから理事長にエレベーターを改善してもらひよつて言つてくるから」

「ヒナ……悪い……」

「あと、これからはちゃんと部活動らしい活動をしなさいよ。こうならぬいためにも」

「努力する」

美希の言葉を聞くとヒナギクは親指を立てエレベーターに乗り込んだ。美希はハラハラした表情のままバルコニーに出ると上から校舎に向かうヒナギクをじっと見つめていた。

「理事長……」

数分後にはヒナギクはもう既に理事長室の扉を勢いよく開いていた。

「理事長……いるのはわかつてます……潔く出てきたひどいですか！？」

明かりのない部屋をどんどん進む。少し中に入つたところで部屋の扉が勝手に閉まった。そしてどこからかキリカの声が聞こえてきた。

『やはりお前か。花菱一人では来るまいとは思つてはいたが……』
「どうこいつもりか知りませんが理沙や泉たちをどうしたんですか……！」

『学校のためにならない生徒など……必要ないからな。貴様も喜ばしいだろ？問題児がいなくなるといつのは……』

「……なにが言いたいんですか？」

『私の計画は既に最終段階まで来ている……邪魔するとあらば……』

すると天井が開きキリカがトンファーを振りかざしヒナギクの頭上から舞い降りた。

「正宗……！」

間一髪ヒナギクはキリカの攻撃を防いだ。キリカはクルクルと回転し着地した。

「私は決めたのだ。学院に不利益な輩は皆私の専属メイドとして雇うと」

「……それで理沙たちを……」

「本日をもつて白皇学院は……メイド育成専門学校へと生まれ変わるのだ……！」

「はい！？……はあ。また余計なことを……」

「余計ではない……昨今の萌えブームにあやかりアナライジングした結果だ……女子男子を問わず素質があればみんなメイドに仕立てやるぞ……！」

「……バカバカしくて話にならないわ。理事長……残念ですけどあなたのもくろみ、ここで私が阻止します……！」

ヒナギクは正宗を構えキリカと対峙。

「だいたい不利益な生徒なんているわけないのよ」

「ほう……！ずいぶんとおかしなことを……。なんなら動画研究部の友は貴様の役にたつていると……？」

「その考えが間違いなのは理事長。人が人と接するのに見返りを求めるなんて……そんなのは友達とは言わないわ。そこにいてくれるだけで楽しい雰囲気してくれたり笑顔になつたり……そういう存在なのよ。あの三人は、確かに苦労もするけど……だから嫌いになつたり鬱陶しいなんて思つたことは一度もないのよ……！」

ヒナギクは正宗を振りキリカは両手のトンファーでそれを防ぐ。ミシミシとトンファーは音をたてる。

「私は……理事長としてやつらに最適な環境を与えていいだけだ……！勉強ができないならせめてメイドとして生かして……」

「理事長だったら……本当にあの娘たちを思つてているなら信じてあげたらどうなんですか……？」

「信じる……！？」

「あの三人が一体どんな大人になるかを……！……可能性を広げてあげるのが大人の役目でしょ！？それを……勝手に未来を決めつけるなんて……」

「くつ……！」

「いい加減にしなさいつ……！」

「ぐああっ……！」

トンファーは真つ二つに分断されキリカは正宗の太刀をまともに食らい倒れた。そして理事長の机の後ろから詩音がおそるおそる姿を現しキリカに近づく。

「そ、そんな…葛葉さまが…」

「大丈夫よ。ちょっと気絶してるだけ。…まったく。思い付くのは勝手だけどいつも止める私の身にもなつてほしいわ。それより…理沙たちは？」

「あ、あいつらなら隣の部屋だ…！」

「ありがとう。隣ね」

「…それから、これ。首輪の鍵だ」

「…首輪？」

「くそう…覚えてる…」

煙と共に詩音とキリカはどこかに消えてしまった。そしてヒナギクは詩音の言つたとおり隣の部屋に入る。

「「お、おかえりなさいませ」主人様」」

「…へつ？泉に…理沙？」

「え…？ヒナちゃん！？」

「なんでヒナが！？」

ヒナギクはメイド服姿の一人に出迎えられた。一人とも真っ赤になり、顔を背けた。

「ち、違うんだヒナ…」されはやりたくてやつたわけじゃなくて…
！」

「うんうん…理事長先生に無理やり…」

「わかってるわよ。でも…なんだかかわいいわよ」

「…そ、そうか？ならこのまま…つてそんなわけあるか…」…助けに来てくれたのか？」

「さうよ。…首輪までされて…」

「うう…怖かった…」

ようやく電流の恐怖から抜け出せた泉は全身の力が抜けたのかその場にへなへなと座り込む。

「さ、もう遅いから帰るわよ」

「もう夜だな…」

「ねえねえ だつたらみんなでごはん食べない? ヒナちゃんにも助けてもらつたしあるよ」

「そうだな! どうせ宿直室にも雪路がいるだろ? し美希も呼んで5人でパーティーだな!」

「なんのパーティーなのよ…。またなにかに託つけて騒ぐんだから…」

「いいじょんか…さあさあ行くぞヒナ…!」

「みんなで朝まで騒いじゃお~」

「そんな…おお、押さないでよーーー!」

「うしてヒナギクの活躍により学院の平和と動画研究部は守られた。しかし安心はできない。三人娘の次なる敵は… そのヒナギクであるからだ。」

新たなる危機（前書き）

これから第2章みたいなカンジです。たにして変わらないけど。散々オリキャラ出すとかいつてますが、いつになるのやひ…。では、どーぞ。

新たなる危機

キリカの野望を阻止した三人娘（正しくはヒナギクなのが）は部活の存続も決まり悠々自適な活動を相変わらず行っていた。土曜日になり三人は部室でぐーたらしていた。

「だが本当は部活をしている場合じゃないんじゃないか？」

「だよねー。期末試験も近いし、勉強したほうがいい気もするけどね…」

「だがいかんせん雪路は温泉旅行…。私たちは誰を頼ればいいのやら…」

三人は部室のイスに座り談笑していた。

「そう言えば…今日は生徒会の仕事らしいぞ」

「『『らしき』つて…どういうことだ？ 理沙」

「いやー昨日な、ヒナに釘を刺されたんだが…」

それは金曜日の放課後のこと。理沙は部活に行く途中にヒナギクに呼ばれたのだ。

「理沙。ちょっと」

「ん？ なんだヒナ」

「明日はちゃんと顔出しなさいよ。生徒会」

「明日なにがあるのか？」

「もう忘れたの？ 明日は生徒会の予算審議の日じゃない。大事な日だから午後1時には大会議室にいてよね。美希と泉にも伝えておいてね」

「ああ。任せる」

という会話を交わしたのだ。それを聞いた美希が部室の中の時計を見ると1時まであと10分だ。

「気付いて良かったな。間に合わなかつたらまたヒナギクに大目玉をくらうところだつた」

「じゃあ行こうか 予算審議つて確か部活動の……」

「ああ。我ら動画研究部も予算を獲得するいいチャンスだな！」

「しかも私たちは生徒会。『ネはきく』

三人は意氣揚々と時計塔にある大会議室へと向かつた。だが待ち受けていたのはちょっとといらだちの表情を見せるヒナギクだ。

「遅い！なにしてたのよ！間に合つたらいいと思つてない？1時つて言つたら12時50分には来てなきや……」

「堅いこと言うなよ。間に合つたらことには変わりない」

「まったく…。とりあえず時間もないし、早く来て」

部屋に入るとすでに愛歌と千桜がテーブルに座り待つていた。ヒナギクは三人娘に予算審議に使う資料を手渡した。

「今までの部活の内容や大会の成績に応じて褒賞金とか予算を出すから査定内容を確認しておいてね」

「ああ。こうなるとなんだか役人になつた気分だな！」

「…野球部にサッカー部にテニス部…。みんな頑張ってるんだね～」

パラパラと資料の紙を見る三人。見終わつたところで美希があることに気付いた。

「なあヒナギク…」この資料なんだが…ないぞ」

「ないつて何が？」

「だから… 部活動の欄に私たちの部がないんだけど」

美希はヒナギクに紙を見せる。たしかにそこに美希の部、つまり動画研究部の名が書かれていたのだ。それを聞き泉と理沙も驚いた。

「えつ！？ なんで！？ なんでないの！？」

「なにかの間違いじゃないのか！？」

二人も慌てて確認するが千桜が堂々と答える。

「間違いじゃない。動画研究部は今回の予算審議には加わっていい

その言葉に三人は耳を疑つた。

「どうしてだ…どの部活も例外なく学校のほうから予算をもらえるはずだろ！？」

「ヒナ……これは一体どうこいつことだ…！」

美希と理沙はヒナギクに問う。そしてヒナギクの返答はこうだ。

「残念だけど… 動画研究部は来年から部ではなく同好会扱いになるの」

「え…？ それって…」

「そうよ。学校の決まりでは同好会は予算をもらえないから」

三人は固まつた。状況をようやく把握すると予想どおり抗議が始ま

つた。

「どうして同好会に格下げなんだ！？」

「やうだーちゃんと部室もあるし部員もいるー動画研究部は何年も
続く伝統ある部活！」

「ひどいよー！」

ワーワー三入にヒナギクが言つ。

「仕方ないじゃない。理事長の指示なんだから」

「理事長！？」

「そうよ。『動画研究部はたいした活動もしていないから部として
扱うわけにはいかない』って」

「ヒナはそれでなんて言つたんだ！？」

「まあ確かに…理事長の言つことももつともだと思つたけど…？」

「えーっ！？ そんな…！」

「しかし理事長はなぜ今になつてそんなことを…」

「やっぱりあのことをまだ根にもつてるとしか思えん…！」

「ほえ？ あの…」とつて？

「前回までを読めばわかる」

「…には。そつか…」

「とにかく」れは由々しき事態…！ なんとかせねば…」

三人がこの危機をどう乗り越えようかと考えているヒナギクにた
しなめられる。

「ちよつとー今は生徒会の仕事を優先してよね。あなたたちの部活
のことは後回し」

「わかったよ…」

「仕方ない…」

「萎える…」

なにを言つても文句の類いやため息しか出で」ない。それを見てヒナギクもため息が出るのだった。

生徒会の予算審議も終わり大会議室では疲れた表情の生徒会メンバーが残るのみ。

「はい。紅茶でよければ入れたわよ」

ヒナギクが他のメンバーのために紅茶を入れてきた。真っ先に飛び付いたのは泉だ。

「やつと終わつたー！私、いつこう重苦じーの苦手…」

「右に同じ」

「以下同文」

理沙と美希も紅茶をむづり。

「あーそうだ！美希ちゃん！理沙ちゃん一部活の」と…

「やうだつたなー！ヒナー！教えてくれー！どうすれば動画研究部は同好会から部に戻れるんだ？」

「え？そーねー…。やっぱりちゃんと部活動らしい活動をすることがじゅ…」

「部活動らしい活動つて？」

「だからその…学校のためになるような活動とか…」

ヒナギクの返答に三人は頭を抱えた。そして理沙がすがる思いでヒナギクに土下座。

「頼むヒナー！理事長に掛け合つて動画研究部を部に復帰させてくれー！」

「ちゅう…やめてよ！理沙ー！そんなことしないで立つてよ…」

「頼むー！」のと一つ、「

理沙はさうに深々と頭を下げる。これだけされて何もしないわけにもいかないヒナギクはある提案をした。

「わ、わかったわよー！理事長に掛け合つてみるつて

「ほ、本当かー？」

「だけど一つ条件があるわ

「やつぱり…」

美希はちゅうとめんべくそいつな表情に。

「あなたたち動画研究部がしつかり活動しているところとそれを証明するためにこの白皇学院に関係ある動画を作つてもうらえるへー」

「ほえ？」

「ほえ？じゃなくて…。あなたたち、いつもくだら…個人的な動画しか作つてないみたいだからたまには学校の役にたつような映像

をとつてくれる」と。いい? そうすれば理事長も認めてくれるはずよ
「あ。それなら簡単だな。よつと」

美希はすぐに持っていたビデオでヒナギクを撮り始めた。ヒナギクは一体なぜ自分を撮り始めたかわからない。

「ちょっと… 美希?」

「これこそ日星学院究極の動画!』生徒会長桂ヒナギク一日密着動画』! おそらく生徒が一番知りたがっていることだらう… できれば入浴時にも撮影を…」

「そんなもの認めませんっ!!!!」

ヒナギクは正宗片手に美希を威嚇。美希は逃げるよつに愛歌の後ろに隠れた。

「まあまあヒナ。 そう怒らない方が…」

「愛歌さんは口を挟まないで!」

「あらあら…。じゃあ… いつこいつのせじうかじりへ。」

「なんですか? 愛歌さん」

今度は愛歌が美希に提案。

「実は動画研究会と同じように部から同好会になつた部活もまだあるのよ」

「動画研究会つて…」

「聞いてる?」

「聞いてます!」

「動画研究会と同じように格下げされてしまったのは… 幽霊研究会よ…」

幽霊研究会。それは古今東西あらゆる幽霊やそういう類いのものを研究する同好会である。

「ほう… そんなものが」

「以前までは部扱いだつたのよ。だけど理事長が『幽霊なんぞ得体のしれない物を調べるなど笑止千万!』って言つて…」

橋下にと

廢帝になら定かにかくだけと和が尽力してなんとか…」

愛歌が廃部寸前の部活を救つたことに三人は驚いた。

（意外だ…。愛歌さんなら潰れた部活を見て喜びそうなもの…）

「ビ、どうして幽霊研究会を存続させたんです？」

里少の質問こ愛歌は即答。

「だつて…幽霊なんて研究する痛い人たちをこの田で捕めると思つとかわいそつで泣けてくるでしょ？」

- 10 -

いいことなのか悪いことなのか三人にはよくわからなかつた。

「冗談よ 生徒会として困っている生徒を放つておけなかつただけ

「アーティストによくね」

「どうあえずその幽霊研究会を訪ねてみたら? なにかいヒントが
もらえるかもしないわよ」

愛歌の言つ通り三人は早速幽霊研究会の部室へ向かつた。いよいよ本格的に動画研究部（会）存続への戦いが始まった。

春だけど怪談物（つぽい）

動画研究部を再び部として認めてもらつたために三人娘は校舎3階にある幽霊研究会（元・部）の部室に来ていた。

「幽霊研究会といつわりには普通の教室となんら変わらなうだけどな」

理沙が言つと泉と美希が同じタイミングで頷いた。

「でも幽霊研究会なんてあつたんだね。全然知らなかつたよ
「たしかに。この部自体が幽霊的存在だな」

「…どうするの？ 入る？」

「愛歌さんが行けと言つたんだ。たぶん大丈夫だろ？」

美希が扉に手をかけ開いた。幽霊研究会の部室といつのに幽霊関連の物は一切なく殺風景極まりない。デスクと茶箱にポットが置いてあるだけだった。

「誰もいないよ？」

「もしかしたらもう廃部に…」

理沙がすかずかと中に入ると急に一人の老人がぬつと出てきた。どうやら扉のすぐ裏にいたようだ。

「おめえ…なに勝手に入つてんだ」「ラア…」

「う、うわ！ ゆ、幽霊…？」

「誰が幽霊だ！ 失礼だろ…」

「えつと…どなた？」

泉が引き気味に質問。幽靈のよつた老人は腰を気にしながら答える。

「バカ野郎…つ！俺はここ白皇の教師じゃねエか！」

「ほえ？そーなんですか？」

「こんな先生いたか？」

「「わあ…？」」

三人娘は皆同じ反応を示す。自称白皇教師はついにキレた。

「ふざけんじや…ねエ！！！！俺はこここの化学教師田中だよバカ野郎！！」

「田中…先生？」

「知つてるか理沙？」

「知らん」

まったく素性の知らない田中先生。しかし田中先生は思わぬことを口にした。

「俺は…おめえら知つてるぞ…生徒会の瀬川、花菱、朝風だろ？」

「当たりです。何で私たちのこと知つてるんですか？」

「俺はな瀬川…。ここに勤めてもう…つん十年になるんだ…。在校生で…知らねえ奴は…いねえんだ」

「へえー。田中先生すごい先生なんだ〜」

泉が感心したが田中先生の表情は相変わらず冴えない。

「なのによあ…俺は生徒全員を知つてゐてのに…何で俺のことは誰一人覚えてねんだよ…チクシヨー…！」

いきなり大声を出す田中先生。その悲痛な悩みに三人娘は共感する。

「んで…花菱。おめえたち一体ここに何しに来たんだ…？」

「実は動画研究部が廃部の危機で…この幽霊研究会も廃部の危機だと聞いたんです」

「誰に…聞いたんかい？」

「愛歌さんです」

「霞か…。あいつは…俺の女房の若い頃に…そつくなんだ」

「はあ…」

「やけながら畠山田中先生。まだ話は続く。

「花菱…おめえも俺の娘のちちゅうやい頃に似てるだ。将来は…いいお嫁になれるだ…」

「どうも…」

美希はそうとしか言ことづがなかつた。横目で理沙に助けを求めるも目を逸らされてしまつた。ちなみに泉は隅にあつた本棚に興味を示し手当たり次第に読んでいた。

「花菱…幽霊は…いると思づか？」

「…こると思います」

「いない」といつと話がややこしくなると直感的に感じた美希は適当に共感しておいた。

「幽霊研究部は…だいたい今から10年前くらいに俺が作ったんだ」

「…。当時は部員も6~7人いたんだが…今は…誰もいねえ」

「部員誰もいないんですか?」

「だから…廃部になるんだ。このままじゃ…花菱いーなにかいい案

は…ねえか？」

「…え」

田中先生は美希に食いついて離れない。理沙も泉のほうに逃げた。

「…たしかおめえたちは…動画研究部だつたな?」

「…そうですが。それがなにか」

「…それだ!!いい案が…浮かんだぞ。今夜…旧校舎に行くぞ」

「旧校舎に?でもあそこは幽霊が出ると噂が…」

「だから…行くんじゃねえか!!いいか…幽霊研究部が幽霊を発見したとなれば…生徒会からも一田置かれ廃部は免れる。しかも…その映像を動画研究部が撮つたとなりや…動画研究部も一田置かれる!一石二鳥だ!!」

「なるほど…聞いてたか?泉。理沙」

今までまったく田中先生と絡まなかつた一人も聞き耳を立ててこの話だけは聞いていた。暗く重い黒雲からようやく光が射し込んだ。そんな気分だ。

「いけるよ…幽霊さんを見つければヒナちゃんもきっと認めてくれるね」

「それだけじゃ面白くない。いつそヒナが怖がるくらいの衝撃映像を撮つてギャフンと言わせてやろう!!」

「おお!それいいな!!ヒナが怖がる姿をさらに撮れれば一石二鳥どじひか一石三鳥も四鳥もいけるぞ!」

一気に三人娘のテンションが上がつていぐ。田中先生も同じだ。

「よしーおめえら…覚悟はいいな!?幽霊に怯えて逃げるんじゃ…ねえぞ…」

「ラジヤー」

「旧校舎に行くとなれば懐中電灯は要るな」

「暗闇でも使えるカメラ也要るし。そう言えば田中先生。幽靈を呼び出すおまじない的なものはあるんですか?」

理沙が聞くと田中先生は部屋の奥からぼんぼりの縦笛を持ってきた。

「こいつが…幽靈を呼び出す道具だ」

「リコーダー?」

「瀬川…この縦笛を持つてけ」

「うん…。でもただのリコーダーだよ?」

「よく聞け…。この縦笛はただの縦笛じゃねーぞ。…実はだな…」

いかにもな雰囲気を醸し出す田中先生に三人娘は一瞬怯える。

「今から15年前…ある一人の男子生徒が…いたんだ。そいつには好きなクラスメートがいてな…。いつもそいつのことしか頭になかつたんだ」

「告白とかしたのか?」

「いいや…。そいつはウブで女子生徒と目が合つただけで顔を赤くする程だ…。しかしよいよ…卒業の時期に差し掛かった…。野郎は卒業式が終わったら告白するつもりだつたらしい…だけど…」

「だけど?」

「その女子生徒は…卒業式には来なかつた。親の急な転勤で…学校から荷物を持ち帰る暇もなく海外へ行つちまつたんだ…」

「…それでその男子生徒はどうしたんだ?」

「ここからが肝心だ…。男子生徒は悲しみに暮れた。卒業式が終わつて…放課後になつても…教室に残つていた。好きな女子生徒と一緒に学んだ旧校舎のな…。そして誰もいない教室で…女子生徒の縦笛を吹いたんだ…」

「 「 「 「 「

真面目に聞いていた三人娘もなにかのスイッチが切り替わる。

「女子生徒は…吹奏楽部でな。縦笛が…すごぶる上手かつた。野郎には…それが一番印象的だつたらしい」

「それで? なんでそれが幽霊と関係あるんだ?」

「…見られたんだ。好きな女子の縦笛を吹いてるとこをな。縦笛を吹きや…音がする。その音を聞き付けた見廻りの教師に見られたんだ。野郎は…死ぬほど恥ずかしかったのか…縦笛を持ったまま…旧校舎の最上階の教室から飛び降りて…」

「…なんだか悲しいのかよくわからないな」

「…それ以来旧校舎のその教室で可愛い女の子が縦笛を吹くと…告白もできずに無念の死を遂げた男子生徒の怨念が出る…らしいんだ」

話が終わると三人娘は曖昧な表情に。同情の余地もなくはないが反応に困る。

「それでその縦笛を吹いて怨念が出たことは?」

理沙が聞くが田中先生はまたまた鬱に。

「今までで幽霊研究部に女子は…いねえから調べようがない。だからよ、この際だから…瀬川にその役を頼む」

「ええ! ? 私い! ?」

「氣立てはいいし可愛いから…きっと幽霊は現れる。あと一つ言つが…幽霊に告白されたら…拒否しちゃ…ダメだぞ。拒否すると幽霊の怒りを買って生氣を吸われる…話だ」

「じゃあ…OKするの?」

「OKすると…氣を許したと思われて魂を食られて…自分が自分じ

やなくなる……らしい」

「なにそれ！？どっちもダメじゃない！！！」

「幽靈が……いることを証明するためだ！瀬川！一肌脱いで……くれねえか？」

「そうだぞ泉！」

「動画研究部の行く末はお前にかかるてるんだ！」

「そんなの……ヒドイよーーー！」

泉の悲痛な叫びも虚しく、夜中、ついに幽靈召喚の儀式が決行されることとなってしまった。一人の少女の命と引き換えに（予定）。

三人娘の帰還（終）

「幽靈なんて……いるわけないじゃない」

生徒会の予算審議も終わり校内のカフェテリアで紅茶を一杯飲みヒナギクは言い放つ。テーブルを千桜と愛歌で囲んでいる。もう夕方だ。

「まあいるわけないけど……」

愛歌も言いつ。だが三人娘に幽靈研究会へ行けと言つたのは紛れもなく当人だ。

「では愛歌さんはなぜあんなことを……？」

そう言いつ千桜の眼鏡は夕日に反射していた。

「幽靈なんているわけないけど……あの三人のこととは放ってはおけない……でしょう？」

愛歌はヒナギクに目線を移す。まあ…と言いつよつた苦い表情をしていれる。

「でも…いくら友達とは言え温情でなんとかしたら他の部活との公平性を欠くわよ?」

「まあ確かにそうだけど…。私たちが手を貸す分には」

「どういう意味?」

「私が意味もなく三人を幽靈研究会に向かわせたと思つて?」

「なに企んでるの…?」

にこりと笑う愛歌にヒナ、ギクは多少なりに恐怖を抱いた。夕日でよく見えないが。

「幽霊がないなら…作るまでよ」

「作る…？」

「ええ。準備にぬかりはないわ 私の情報では今夜、旧校舎に侵入するらしいのよね」

「旧校舎…？ よりによつてあそこ…？」

「まあいろいろ噂は絶えないけど平氣よ。幽霊なんて…いるわけないんだから」

強調するように愛歌はヒナ、ギクに言つ。ヒナ、ギクはこくろと頷く他なかつた。

日も暮れ辺りは真っ暗に。三人娘と田中先生は旧校舎の前に來いた。「進入禁止」という立て札を悠々通り過ぎ入口の前の門の目の前にいる。

「さて…お前たち…覚悟はできるな？」

「もももももちろん！」

「声が…震えるぞ？」

「そそそんなどないよ…」

田中先生に指摘され泉の声はますます震える。これから幽霊降臨の生け贋になつてしまふかもしれないからだ。

「泉。頑張れ！私たちの為に一肌脱いでくれー！」

美希は巨大な照明を携えている。

「ていうかここまで来て引き下がる程余裕も尺もない…さつさと終わらせるぞ…！ウダウダと苦節3ヶ月…」

「いやいや…3ヶ月つて？まだ1週間も…」

「つるさいー実際上の話だ。気にするな」

理沙は泉の背中を押し嫌々旧校舎の中へ。ギイギイと音をたてて扉が開いた。中は相変わらず薄気味悪い。と思えばなんだか人の手が加えられていた。至るところの蛍光灯が新しくなつていて埃一つ見られない。

「な…なにこれ？」

「やけに真新しい。場所間違えたか？」

「そんなはずはない…！」と思つが

三人娘は妙に明るい旧校舎の中を進んでいく。そしていよいよ例の幽霊がいるという部屋に差し掛かった。

「…なあ。これは一体どういうことなんだ？」

「一切靈的な気配がない。これじゃただの夜回りじゃないか」

「でも手ぶらじゃ帰れないよ？」

三人娘が拍子抜けしていたその時。不意に電気が消え辺りは漆黒に包まれた。あまりにいきなりのことに三人はあわてふためく。

「げ！なんだこりや！？」

「とりあえず部屋から出ぬぞ！…」

理沙はすぐ引き返そうとしたが扉が閉まつていて開かない。なにかとてつもない力で押さえられているような感じだ。さらに暗くてはつきりと様子がわからない。

「いかん！閉じ込められた！…」

「ええ！？じゃあどうするの！？」

「窓だ！窓が開いている！」

美希の言つように確かに窓は開いている。だが飛び降りて平気な高さではない。

「そうだ！携帯だ！誰かに助けを求めれば…」

「誰に！？」

「ヒナあたりが…！…！？」

美希は言葉を失つた。なんと窓の外から人がフラフラ浮遊しながら近づいてきたのだ。暗闇でよく見えないが涙を流している。白装束を着た女だ。

「ぐすり…一ひとひととカメラに納めて立ち去りなぞ―――！」

「…！」

「…キヤアアア…！」

三人娘はあまりの怖さに発狂した。カメラ役の理沙は何度も何度もシャッターを切る。手振れが激しい。

「いかん！逃げろ！」

美希は一目散に扉を開け部屋を出た。今度は簡単に扉が開いた。泉と理沙も後に続く。

「ニヤアアアアアー！！」

「逃げろ！魂持つてかれるぞ！！」

「美希ちゃん待つてよおーっ！！」

三人娘は息を切らしようやく旧校舎から脱出できた。疲れはて呼吸が乱れないと外で待っていた田中先生がやつて来た。

「ど、どうだつた？」

「ゼーハー…ゼーハー…これを…！」

理沙はカメラの画像を見せた。そこには確かに窓の外に浮かぶ女性

が写りは悪いが確認できた。

「よかつたな……」それで三人の苦労も報われそうだ

「ゼー……ハ……」

「よ、よかつた……そ、それよか……」

美希はポケットから携帯電話を出し報告しなければならなかつた。相手はヒナギクである。何回かの呼び出し音の後、ようやく出た。

『も、もしもし……?』

「わ、私…美希。ヒナ……聞いて驚くな……!」

『ぐすつ……な、何……?』

「聞く前から泣いてどうする…。いたんだよ。幽霊がぞ……証拠もある……!これを見ればヒナも動画研究部の意義を認めて……!」

『……それには及ばないわ』

ヒナギクは嗚咽を漏らしながら言つ。美希もだがヒナギクも息が粗い。

『旧校舎まで調べに行つた…その心意気に免じて存続を…認めるわ

「…ほ、本当か!?」

電話に出ながら美希は泉と理沙を見た。アイコンタクトで泉も理沙もなんとなく察し安堵の表情になつた。

『と、とにかくもう遅いから帰りなさいよ…』

「あ、ああ……じゃあな、ヒナ…」

電話が終わると苦労から解放された衝動で三人娘は抱き合つた。その様子を田中先生は遠目で見ていた。

(……骨を折った甲斐が……あつたつてもんでい……)

そしてもう一人安心する人がいた。旧校舎の上にいたヒナギクである。側には愛歌に千桜もいた。

「お疲れさまです。会長」

「もー……ワイヤーアクションなんかもつ金輪際やらないんだから……」

「まあ会長の活躍での三人も動画研究部存続になったことですし

……

千桜はヒナギクの腰に繋がれていたワイヤーを外した。ヒナギクの顔には涙の後が伝っていた。

「それにしても愛歌さん。いつの間に屋上にこんな設備を?」

屋上にはワイヤーに加え旧校舎の電気の一切をコントロールできるシステムに監視カメラのビデオまで設置されていたのだ。すべて霞家負担である。

「まさか動画研究部存続に2千万円かかるなんて……会に格下げしないほうがよかつたんじゃないのかしら」

愛歌は皮肉っぽくヒナギクを見た。だがヒナギクは足もつかない宙に浮かされた恐怖でそんなことに気付きもしなかった。

三人娘の帰還（終）（後書き）

中途半端になるけど終わらないよりかはマシ

と思い速攻終わらせました。思えば…3話で終わらせておけばよかつたです。毎回思つのは毎度毎度オリキヤラを出しては失敗し出しへは失敗し…進歩。まあこつちはオマケ程度。本編が10ならこつちは1くらいの出来でしょうか。頭の中ではいろいろ凝つた設定になるのに弋書きと雑極まりない。だから開始から3ヶ月もかかるんだあ…な。

今度からはちやんと考えよつと…つていつのを何度も繰り返したことか。もう私の言葉は当てになつません。わよつなー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5767j/>

生徒会三人娘！動画研究部存続への戦い編

2010年10月10日14時42分発行